

日本語と中国語の形容詞述語文について

—語用論的立場からの一考察—

李 奇楠

1. はじめに

本稿では発話として使われた日・中形容詞述語文の、パロールレベルでの語用論の意味を考察しようとするものである。話し手は特定の時、特定の場で、ある形容詞述語文を使い、それを通して、ある具体的な語用論の意味を表そうとしている。その意味は何か、どのようにその意味を捉えるのか、それはまさに語用論の研究課題である。もともと語用論の考究対象は発話である。発話とは「何かを伝える（＝伝達する）ために発せられることば」⁽¹⁾を指している。ここでは外形が形容詞述語文の日本語と中国語の発話を対象として、双方の語用機能を求めようと考えている。

文の意味・語の意味が話し手の意味とどのようなつながりを持つかについて、「会話の理論」の構築者グライス（Grice, H. P.）は次のように述べている。

発話者がたとえば複数の事柄のうちのどれを伝えようと意図しているのかについて疑問が生じるような場合、概してわれわれは発話の文脈（言語的であれ、非言語的であれ）を参照して、どの選択肢が発話者の他の言動に適當するか、またどの意図が特定の状況において発話者が明らかに持っている目的に適うかを問う（たとえば火事場で大声で「ポンプ」と叫ぶ人は自転車のポンプを求めているのではあるまい）。これと対応する非言語的な事例がどのようなものであるかは明らかである。たとえば、煙草を口に挟んだばかりの男がなぜポケットに手を入れたかという疑問を解決する基準となるのは、その男が明らかに持っている目的との関連性である。⁽²⁾

2. 意味の確定

一つの形容詞がいくつかの語義を持つ場合に、どの意味で使われているか

は、実際の発話の中で、その意味が確定される。例えば、中国語の“冷(寒い)”という形容詞は温度が低いという客観的な状態と、温度が低く感じられるという話し手の感覚を表すことができる。次の会話でその使い分けが分かる。

例1 这一夜月色很好。觉慧不想睡觉,三更敲过了,他还在天井里闲走。

“三弟,你为什么还不睡?天井里很冷!”觉民从房里出来,看见觉慧还在天井里,便立在石阶上问道。

“月亮这样好,我舍不得睡,”觉慧不在意地答道。

觉民走下了石阶。他打了一个寒噤,口里说一声:“好冷!”一面仰起头看月亮。

〈家〉(以下出典とその略称は文末に示す)

(その晩は月がよかった。觉慧は睡りたくなかった。三更の銅鑼がなったというのに、彼はまだ中庭をさまよっていた。

「三弟、なんで寝ないんだ。もう庭は寒いだろう」觉民が部屋から出て来て石段に立つとそういった。

「月がいいんで、寝るには惜しいんですよ」觉慧は上の空で答えた。

觉民は石段をおりて、中庭に出た。「こりゃあ寒い」彼は身ぶるいして月を見上げた。)

例1では、最初の形容詞述語文“天井里很冷!(もう庭は寒いだろう)”は発話時における“天井里(庭)”の温度が低いという状態を“天井(庭)”の外側にいる話し手觉民が述べたのに対して、その後の“好冷!(こりゃあ寒い)”^③は話し手、同じく觉民が“天井(庭)”に出て、全身で自ら感じた温度が低いという感覚を表出している。

同じ「さむい」という述語形容詞が使われた日本語の用例は次のようなものがある。

例2「体もフトコロも手の内もさむいやあ」

小耳の川ちゃんのぼやきポーカーが早くもはじまろうとしていた。

以前この塔屋の上でよくやっていた春や秋の季節と違って、冬のさなかに屋上やってくる人は誰もいそうになかったので、そのへんのことをあま

り気づかわずに勝負に集中できるのは嬉しかった。しかしいくらウイスキーをのみなから、といっても、時間とともにぐいぐいと体の内側にねじ込んでくる十二月の寒さは思った以上に厳しいものだった。いつの間にか小耳の川ちゃんは片手に手袋をはめていた。

〈新橋〉

発話の時間（十二月という冬のさなか）、場所（屋上）と発話時の話し手の行動（トランプゲームをやっていること）から、「体もフトコロも手の内もさむいやあ」という一見妙な感じの発話の意味が理解できる。ひとつの文で話し手の全身に感じた気温の低さ、所持金が少ないことと手の中に持っているカードの組み合わせの弱さという総合状態をうまく表している。

また次のような例もある。

例3 「世の中は辛いようで甘い。甘いようで辛い」

そこへ丁度、頃合よく、お汁粉が出てきた。一人前ずつの小さな塗りのお盆に、汁粉碗がのせられてあり、傍にちゃんと、シソの実の辛く煮たのも、そえられてあった。

「ほんとだ。甘くて、辛いよ」

藤原は笑った。

〈太郎〉

最初の発話「世の中は辛いようで甘い。甘いようで辛い」はいろいろ世間話の後の、「世の中」の性質に関する話し手の叙述だが、そのあとの「甘くて、辛いよ」は文脈からわかるように、その場に出されたお汁粉のことを指している。

3. 言外の意味

実際の発話においては、話し手の真の意図により、同じ文でも違う語用機能が果たすことがある。そのため、その語用機能が把握できないと、コミュニケーションのスムーズな進行が妨げられる。例えば次のような例がしばしば見られる。

例4 “蘊华，我了解你，你处境困难，” 倩如声音朗朗地说，琴不知道倩如是在嘲笑她，抑或是同情她。

〈家〉

（「蘊華、あたしにはわかるわ。あんたの立場はむずかしいのよ」倩如の
声は朗らかだった。琴には、倩如が嘲っているのか、同情しているのかわ
からなかった。）

“你处境困难(あんたの立場はむずかしいのよ)”という形容詞述語文はただ聞き手琴（蘊華）が現在置かれている立場の状態を述べているだけではなく、それ以上の意味が含まれている。ただそれは同情なのか、それとも嘲笑なのか聞き手には聞き分けられなくて、戸惑ってしまっている。この例のあとの文脈でわかるのだが、話し手の意図は嘲笑ではなく、同情であった。しかし、それはあくまでもあとのことで、発話当時の状況から見れば、語用失敗の典型例になっている。その反面、発話によって、話し手の真意、言外の意図が確かに存在する。それにその真意、言外の意図が話し手にうまく伝達され、また聞き手に認知され、理解されることがどんなに重要なのかを教えてくれている。

3.1 中国語の場合

発話者は、文字通りの意味より言外の意味に重点を置いて発話する場合がしばしばある。

例5 “你对爷爷说了些什么话？你为什么先告诉我，就跑去对他说？你真笨!” 觉新抱怨觉慧道。 〈家〉

（「おまえ爺爺に何をいったんだ。なぜ先に俺に話さないで、爺爺のそこへ飛んでいったんだ。ばかだなあ。」觉新が怨むようにいった。）

“你真笨（あなた 本当に 愚かだ）”という形容詞述語文は聞き手の属性を述べることを通して、話し手の聞き手への不満の気持ちを表している。言い換えれば、話し手はこの属性形容詞述語文を用いて、聞き手を咎める発話行為を遂行したのである。

例6 “琴真聪明!……真勇敢!……她真好!” 觉民忍不住称赞道，脸上露出满意的笑容。 〈家〉

（「琴はほんとうに聡明だよ……それに勇敢だし……まったくすてきな女

性だ。」覚民はだまっているのが堪えきれないらしく、笑顔でだしぬけにそんな賞讃をはじめた。)

例6では三つ連続の形容詞述語文“琴真聪明!……真勇敢!……她真好!”は琴という女性の性質を話し手覚民が述べているだけではなく、彼女を賞讃するという発話行為を遂行しているのである。前後の文脈を通して、話し手覚民の琴への憧れ、恋の気持ちを自然に読み取れる。

例7 “不要紧，现在的年纪都很轻。将来到了那个时候，我会向太太说。我一定有办法。我绝不是在骗你。”他温和地安慰她，依旧捏住她的左手。

〈家〉

(「大丈夫だよ。僕はまだ若いんだ。将来その時が来れば、僕、奥さんに必ずいうよ。方法はきっとあるさ。僕はけっして君をだましたりしないよ」彼はやさしく彼女を慰め、相変らず彼女の手をもてあそんでいた。)

“现在的年纪都很轻 (僕はまだ若いんだ)”という形容詞述語文は文字通りの意味から見れば、話し手(覚慧)と聞き手(鳴鳳)二人の年の若さという発話時の状態を述べているが、実はその前後の発話とともに話し手(覚慧)が聞き手(鳴鳳)を慰めるという発話行為を遂行している。つまり、話し手の発話の意図は聞き手を慰めるというところにある。

例8 来的是琴和淑英，淑华两姊妹。她们三个人走到梅的面前，淑华看见梅的脸，故意惊讶地笑道：“梅表姐，大哥欺负你吗？怎么你眼睛都哭肿了？”淑华又注意地看觉新的脸，觉新极力躲开，但已经给她看见了，她又说：“怎么你也哭了？你们分别了几年，现在见面，正应该欢欢喜喜！怎么躲在这儿相对而泣？”梅红了脸低下头去。觉新也把头掉开看别处，口里含糊地分辨说：“今天眼睛痛。”

淑英听见这句话便也插嘴嘲笑道：“奇怪，早不痛，迟不痛，偏偏梅表姐来了，你的眼睛就痛了。”

〈家〉

(来たのは琴と淑英、淑華で、三人は梅の前に立つ。淑華が梅の顔を眺め、わざと驚いたように笑いながら「梅表姐、大哥がいじめたの？眼が泣き

腫れてるわよ」淑華はまた覚新の顔に注意を向ける。覚新は横を向いたがもう遅かった。「どうしたの？兄さんも泣いたのね。久しぶりで会ったら、喜ぶのが当たり前なのに、こんなところへ逃げて来ていっしょに泣いてるなんて、ほんとうに変ね」梅は真赤になってうつむいた。覚新もわざと横を向いて、いいわけみたいにいった。「眼が痛いんだよ」

淑英がそれを聞いてまた口をはさむ。「おかしいわね。梅表姐が来たらちょうど痛くなったの？二人ともいっしょに痛くなったの？」（家）

この例は少し長いですが、話者間の関係を理解するために必要と思うので、そのまま引用している。中の形容詞述語文“今天眼睛痛（今日眼が痛い）”は話し手覚新の感覚表出ではなく、久しぶりに昔の恋人梅（二人は愛し合っていたが、いろいろな原因で結婚できず、それぞれ別の人と家庭をもつ。その後、梅は夫に死なれ、また一人になってしまっている。）に会って、泣いて眼が赤くなっていることを隠すためにわざと嘘をついたのである。聞き手もその二人の関係を知っているから、話し手の発話の意図が当然読み取れている。会話が真実を伝えるという公理に違反する場合は、何か隠されているというグライスの会話原則にあるように発話には「何か」が隠されているから、聞き手が話し手の文字通り以外の含意表現を求めるのは当然である。

3.2 日本語の場合

日本語の中では形容詞述語文が用いられ、文字通りの意味より言外の意味を目的に発話することもしばしば見られる。

例9 新橋の赤ちょうちんで二時間も飲むと、「ここはもうあきたぜ」と、森川は巻き舌で言った。

「もう一軒いこう。行きつけのいい店があるんだ。ママが綺麗だよ」

薄手のコートをはおりながら、森川はすこし赤い眼をして言った。

森川の行きつけの店は高田馬場にあった。駅前通をよけて、神田川沿いの小道をすこしのぼっていくと、貸し衣装屋と電気屋に挟まれて、その小道の全体の風景とはあきらかに場違いなかんじで檜造りの小料理屋があ

った。

(新橋)

「ママが綺麗だよ」は文字通りの意味では店のママの美しさを示すのであるが、ここではその前の発話とともに、もう一軒の料理屋へ飲みにいこうという同僚を誘う言外の意味に使われている。

例10 「飯でも食っていこうか」

わたしが誘うと、内藤は戸惑ったような表情を浮かべた。家に帰ってもひとりのはずだった。あるいは、金のことを心配しているのかもしれない。

「奢るよ。ここしばらくは大金持なんだ」

ことさら威勢のいい口調で言うと、内藤は頷いた。

「何を食べようか」

「肉が……いいな」

遠慮がちに内藤が答えた。

(一瞬)

この「肉が……いいな」という発話は相手の問いに対して、肉が食べたいという自分の希望を表出する間接発話行為になっている。

例11 「一軒、知っている店があるから、ちょっと寄っていこうか」

「うるさいところは嫌だなあ」

沢野が立止って警戒するような声で言った。

「静かなところだよ。ここから歩いていけないし……」

(新橋)

「うるさいところは嫌だなあ」はこの文脈で話し手の嫌悪感の感情表出より、「うるさいところへは行きたくない」という意思表示がされる発話である。

例12 僕は子供のとき山火事を見て怖しさを知っている。たくさんの犠牲者が出たのを覚えている。それで四五人づれの避難者に、

「山火事は危険です。小さく見える火でも、ことに昼間は幅の広い大火です。火が、どろどろ下に崩れ落ちます。焼石や岩が転がり落ちます」

通りすがりに僕はそう云ったが、相手は感じない風で山の方へ行つて

しまった。

(黒い)

「山火事は危険です。」という発話はその後の内容とともに「山の方へ行かないように」という阻止の間接発話行為を遂行している。

例13 死人の母親は火傷して、全身が脹れていた。もう何も分らないようになっていられるらしい。死人の妹が一人、これは怪我をしているとは見えないが、放心したように口をあけたまま座っていた。この娘に「お気の毒です」と挨拶すると、「はい」と言うだけで表情も変えなかった。

(黒い)

例14 「暑いですなあ」と重松が云うと、二人とも「やあ、暑いですなあ」と云った。当村の挨拶言葉は、夏の天気の良い日なら「暑いですなあ」で、夕方なら「お疲れでしょう」である。雨の降る日ならお互いに「良いお湿りで」と挨拶する。

(黒い)

例15 「早いですね」

私が挨拶がわりに言うと、金子は立ち上がって答えた。

「今日はここで具志堅のパーティーがあつてね」

(一瞬)

「お気の毒です」も「暑いですなあ」も「早いですね」もそれぞれ語彙的意味は違うが、上例の発話においてはいずれも挨拶の発話行為を果たしている。いわゆる異なる形容詞文による同一語用機能の実現だと言えるだろう。

一方、次の「駄目」という同一の述語形容詞は使う場面によって、またそれぞれ違う語用機能になっている。

例16 「ジムだけではやっていけませんか？」

私が不躰な質問をすると、森田はその温和な表情を崩すことなく、

「駄目です」

と答えた。

(一瞬)

例17 そこに、タオルを首に巻いた船橋ジムの会長がやってきて、大きな声で内藤を罵りはじめた。

「駄目だろ、あんな試合をしてたんじゃ、ええ？もっと手を出せよ。俺が傍でそう言ってるじゃねえか。言うことを聞けよ、内藤、おい……」(一瞬)

例18 また撫でようとする、夫人が僕の手首を抑えた。

「駄目、撫でちゃいけません。薬をつけるまで、そっとして置きなさい。

撫でると、手から黴菌が入ります」

(黒い)

例16の「駄目です」は「ジムだけではやっていけない」という不可能だという話し手の否定的判断を表している。例17の方は試合のやり方が悪いことを叱り、罵るという発話行為を、例18の方は禁止という間接的依頼行為を遂行している。いわゆる同一の形容詞文による異なる語用機能の実例である。

4. おわりに

以上考察したように、いくつかの異なる形容詞述語文が同一の語用機能を果たすことが出来るし、同一の述語形容詞が異なる語用機能を担うこともできる。つまり、発話機能の文機能との違いが鮮明に反映されている。このことはD.スペルベル・D.ウイelson(1999)が以下のように述べていることを証明している。「文の意味表示は、その文を使った発話すべてが共有する意味の共通核のようなものを扱う。しかし同一文を使った異なる発話は解釈が異なる可能性があり、また実際のところ、たいていの場合解釈が異なるのである。文の意味表示の研究は文法に属しており、発話解釈の研究は現在では語用論として知られる分野に属する。」「発話は思考を伝えるのに使われるだけでなく、表現されている思考に対する話し手の態度や、話し手とその思考の関係を示すのにも用いられる。言い換えれば、話は「命題態度 (propositional attitude)」を表現したり、「発話行為 (speech act)」を行ったり、「発話の力 (illocutionary force)」を伝えたりするのである。」⁽⁴⁾

語用機能は個別言語を超える一般言語学の問題である。以上の考察から中国語でも日本語でも同じ現象が見られた。このことから、語用論という理論の普遍性が証明されたと言えよう。

用例出典

・(家)《家》巴金 人民文学出版社 1953

『家』巴金作 飯塚朗訳 岩波書店 1956

- ・(一瞬)『一瞬の夏』沢木耕太郎 新潮文庫 1984
- ・(黒い)『黒い雨』井伏鱒二 新潮文庫 1970
- ・(新橋)『新橋烏森口青春篇』椎名誠 新潮文庫 1991
- ・(太郎)『太郎物語—高校篇—』曾野綾子 新潮文庫 1978

註

- (1)今井(2001)p3。
- (2)清塚訳(1998)p238。
- (3)ここの“好”は形容詞“冷”の前に現れ、程度の強さを表す副詞として使われている。
- (4)D.スperlベル・D.ウイilson(1999)のP10、P12。

参考文献

- 赤坂和雄(1982)「日英語の形容詞の比較」『国語学論説資料』19第1分冊 論説資料保存会
- 今井邦彦(2001)『語用論への招待』大修館書店
- 于康・張勤編(2000)『中国語言語学情報 2 テンスとアスペクト I』好文出版
- 王亜新(1996)「日本語と中国語の主語・述語について—主語と主題にかかわる問題点—」
『国文学 解釈と鑑賞』第61巻7号 至文堂
- 大河内康憲編(1997)『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版
- 加藤彰彦・佐治圭三・森田良行編(1989)『日本語概説』おうふう
- 神谷修(1984)「中国語と日本語の形容詞について(その一)」『国語学論説資料』21第1分冊
論説資料保存会
- 朱德熙(1980)《現代汉语语法研究》商务印书馆
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎(1994)『動詞の研究 動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房
- 前田洋文(1989)「日本語形容詞・形容動詞などとそれに対応する英語表現との比較—英作文指導に関連して—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第38巻 pp211—234
- 八亀裕美(2001)「現代日本語の形容詞述語文」『阪大日本語研究 別冊1』大阪大学大学院

- Sperber D, Wilson D (1995) *Relevance: communication and cognition* Basil Blackwell, Oxford (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳 1999 『関連性理論—伝達と認知』 研究者出版)
- Grice, H.P. (1989) *Studies in the way of words* Harvard University Press (清塚邦彦訳 1998 『論理と会話』 勁草書房)
- Yule, G. (1996) *Pragmatics* Oxford University Press (高司正夫訳 2000 『ことばと発話状況—語用論への招待—』 リーベル出版)

(り きなん)